

読書の四季

私と本と一〇〇号と

学習院高等科 科長 林 知宏

告白すると、私は活字中毒者である。書物なしに生きていけない。そばに本を置き、時間がある時に眺めることで気持ち落ち着く。そうした趣味のない人からすると不思議に思うかもしれないが、コーヒーとともにパラパラとページをめくり、読んでいくことが一つの精神安定剤の役割を果たすのである。

マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』は、読書が癒しになる好例である。長大な小説だが、今まで二種類の個人全訳（井上充一郎訳、鈴木道彦訳）を通じて多くの読者を獲得してきた。昨春秋には、一挙に新訳（高遠弘美訳、吉川一義訳）が二つ増えた。また暮れには保苺瑞穂『ブルースト

読書の喜び』も刊行された。タイトルからして私の言わんとするところをずばり表しているではないか。

ブルーストの小説は実に多くの美しい描写を含んでいる。例として第一編「スワン家の方へ」から引用しよう（鈴木道彦訳による）。雨と陽の光がもたらす情景は次のように描かれる。

『雨の雫はみな一斉に飛び立ってゆく渡り鳥のように、びっしりと並んで空から落ちてくる。雫はけっして離ればなれにならず、さつと過ぎてゆくあいだもでたらめに進むわけではなく、逆に一滴一滴が自分の場所を維持し、あとからつづく雨の雫をそこへ引き寄せ、空はツバメの群れが飛び立つ以上につず暗くなる。』

空から地に至る雫の旅が終わったように見えるときでも、ひ弱でゆるろした雫がまだいくつかおくれてやってくる。けれども、私

学習院高等科
図書委員会
会報
No.100
発行
2011.3.22

たちはもう避難場所から出てゆくのだ。なぜなら多くの雫が葉の筋のあいだにいつまでも戯れていて、それが葉の先にぶら下がったり休んだり、太陽にきらきら輝いたりしながら、突然枝の高さからぼつりと鼻の上に落ちてくるからだっ

実に平凡な、日常的に体験する天候と風景が、これほどまでにいきいきとユーモラスに表現されることに感嘆の念を抱いてしまう。同時に私はこうした一文に出会うことによって自分自身が縛られた感覚から解放され、安らぎを覚える。ブルーストは五〇年あまりの生涯の間、喘息に悩まされた。だがある人に言わせると、ブルーストにとって病気は「一種の才能」であるという。なぜなら先のような文章は、天気や季節のわずかな変化に敏感にならざるを得ない肉



体の条件がもたらしたはずだからである。私はブルーストのような鋭利な感性をおよそ持ち合わせていないが、健康にだけは恵まれていた。その意味で大変幸福であり、非才を嘆くには及ばないのだろう。小説の世界に身を浸すことで何かが変わる。それで十分なのだ。そういうえばブルーストのこの小説ほど、幸福を意味する言葉

(bonheur)が多用されている例は珍しい。彼は幸福感がどこに存するかをわれわれに示しているように感じる。読書はこうして明日への活力を私にもたらしてくれるのである。

ところでこの一文のタイトルを讀んで、ジャズの名曲「貴方と夜と音楽と」(ビル・エバンスの名演で知られる)を連想した人は偉い! 一つの日かみんなと酒場で本や音楽について語り合える時が来るといいなと思う。若いからこそ感じることと、年齢を重ねて初めて分かることと、その両方があるのだから。私は酒の方は強くないけれども、いくらでもおごつてあげますよ。

今回の一面は、我らが学習院高等科長こと林先生のお話でした。

『読書の四季』は、この三学期でなんと一〇〇号を迎えました。毎学期刊行されていたと仮定しても三三年の歴史を持つこととなります。これからも『読書の四季』がずっと続いて、五〇年、百年と歴史を重ねていってほしいものです。

さて、記念すべき今回の『読書の四季』は一〇〇号といつことと、今の『読書の四季』と初号の『読書の四季』を比べる特集や文化フォーラムの様子を二つ、書評に、前編集長からのこの一年を振り返ったコラムも掲載しています。最後までお付き合い頂ければ幸いです。では、どうぞ!



百について

調べてみた

二〇一〇年と百をキーワードに調べてみたところ、意外とできてました。

- ・京王電鉄 開業百周年
- ・近畿日本鉄道 開業百周年
- ・日立 創業百周年
- ・不二家 創業百周年
- ・日本初の動力飛行百周年

と、二〇一〇年で百周年を迎えた会社や出来事が多くありました。次に、今回ピックアップしたのは

ビタミンの歴史

実は、ビタミンが発見されたのも、今から百年前の事だったので、これについて調べてみると、そこには大変面白い話があったのです。

ビタミンを発見したのは、日本人の農芸化学者、鈴木梅太郎博士で、一九一〇年に米糖から取り出すことに成功した、脚気に効く物質、それがビタミンでした。アベリ酸(後にオリザニンに改名)と名

付け、その年の一月三日の東京化学会例会で報告し、翌年論文を発表しました。それが現在のビタミンB1にあたります。

しかし、論文が日本語だったために国際的に認知されず、一九一一年に、ポーランドのフンク博士が、鈴木梅太郎博士が発見した同じ物質を分離したその物質を、生命の「vital」とアミンの「amine」から「vitamin」「vitamin」と名付け、世界的に広まりました。ですから、命名こそできなかったものの、人類初のビタミン発見者は日本人であったと言えるのです。

そして、鈴木梅太郎博士がアベリ酸を報告した二月一三日は「ビタミンの日」とされています。

